

Title	尾張の嘗百社とその周辺
Sub Title	Shohyakusha : an Owari society of natural history, established in the late Edo period
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide) 田中, 誠(Tanaka, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of the natural science). No.47 (2010.) ,p.15- 39
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	原著論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20100331-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

尾張の嘗百社とその周辺

磯野直秀*・田中 誠**

Shōhyakusha : An Owari Society of Natural History, Established in the Late Edo
Period

Naohide ISONO and Makoto TANAKA

「嘗百社」は尾張の博物家の会で、江戸の「赭鞭会」^{シヤベンカイ}と並んで著名だが、結成の時期やメンバーに不明の点が少なくない。また、しばしば採葉（採集）に赴いて嘗百社に貢献した花戸^{カコ}（植木屋）「曾吉」についても、名高い割に、生没年や経歴は知られていない。

ところが最近、その空白を埋める材料が、長谷川^{ヒトシ} 仁旧蔵資料から出現した。

長谷川先生は昆虫学者であったが、博物誌の歴史にも詳しく、その師の矢野宗幹先生^{ムネモト}から膨大な資料を引き継がれた上、御自身でも多数の和古書を収集されていた。先生は2006年に亡くなられたが、このたび御遺族の御好意で、その旧蔵書・旧蔵資料の多くが国立国会図書館に寄贈されることになった。寄贈に先立ち、田中はその整理と目録の作成、磯野は内容の検討に当たったが、そのなかに、尾張関係の興味深い新出資料が多数含まれていたのである。

本稿ではそのうちから花戸曾吉と嘗百社についての新資料を紹介し、曾吉の略年譜、嘗百社の歩みの概略、嘗百社員のリストなどをまとめておきたい。

引用文には現行字体を用い、明らかな誤字は訂正し、別記しない場合は、濁点・句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の（ ）は原注、[]は著者による注記・補足である。

また、本稿に多出する『吉川著作集』は吉川芳秋著『吉川芳秋著作集：医学・洋学・本草学者の研究』（八坂書房）、「沿革」は伊藤圭介著「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雜記」（『錦窠翁九十賀寿博物会誌』に初出、『吉川著作集』30～33頁に再録）のそれぞれ略称である。また、注記は各節あるいは各資料の末尾に置いた。

* 〒232-0066 横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210、慶應義塾大学名誉教授（76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.）

** 〒183-0051 府中市栄町 3-24-7、昆虫学史研究家（24-7, 3-chome, Sakaecho, Fuchu-shi, Tokyo-to 183-0051, Japan） [Received Sept. 25, 2009]

第1節 小栗曾吉資料

長谷川旧蔵「小栗曾吉資料」は下記①～⑤から成る：【 】内は本稿の資料番号で、以下A B C…の順に取り上げる。

- ①-1 「尾張植木屋小栗曾吉履歴材料」：伊藤篤太郎「小栗曾吉之孫訪問記」【B】
- ①-2 「尾張植木屋小栗曾吉履歴材料」付録：一枚刷「口演」【C】
- ② 「小栗曾吉資料」，伊藤篤太郎編：柳田政矩筆「小栗曾吉略伝」【A】のほか，曾吉の八十賀に際して博物家たちから贈られた画の題と詩の写し
- ③ 「曾吉之伝取調ノ事」：伊藤圭介口述，同篤太郎筆記【D】
- ④ 嘗百社一枚刷：大窪昌章原画の草木3点を描く（29頁の図1：Bに詳しく記述）
- ⑤-1，2：①-1で伊藤篤太郎が曾吉の孫小栗光義を訪ねた折，耳の遠い光義との筆談に用いたメモ2枚らしく，2枚とも両面に鉛筆書き
- ⑤-3：細野要斎『諸家雑談』（名古屋叢書三編・12巻所収）の曾吉についての個所の写し
- ⑤-4～6：曾吉命名と伝えるテガタチドリなどについてのメモ，3枚【E】

- A 「小栗曾吉略伝：凌雲柳田政矩筆」，資料② [注1]：新出資料。小栗家の出自や，曾吉が尾張藩薬園の管理を命じられた件を記すので，筆頭に置く。返り点は原文どおり。

小栗曾吉翁，業種樹，従水谷豊文子，受本草，明通其要，奇草異卉，一見使弁焉，其所培養者，無不蕃殖也。享和二年壬戌二月，官命令養殖御薬園諸草，採菓草深山窮谷，遠近三十国，加賀白山十三度，播磨池田三十三度，大和宇田松山不知其数。云，西至讚岐阿波，東至下野，其勤劳概可知也矣，性頗不羈，…凡諸草指其所産之处，終無謬妄。去年 [注2] 余同遊伊吹山，見攀披巉巖蒙茸登陟險阻勢也，身体健勁，步履敏捷，覺有絶人類者，同伴諸子無不奇者，始知他所，跋涉之山谷丘壑，亦復如斯，而人之不能採者，能採之，人云不能知者，能知之，實以奇人，可目耳。余聞翁父伝吉學本草於岡田氏，水谷氏，来往此地，其先世住美濃国可児郡矢当村，氏族今尚四十家，而翁家為宗小栗氏，旧名家也 [注3]。翁之出，豈有以乎。余於本草所不瞭然者，因翁原實得斷決者不少，實有裨益之友也。今茲年，八拾，二月廿日 [注4]，其生誕也。記之，永伝其子孫而已矣。

嘉永六年癸丑春

凌雲柳田政矩

[注1] 柳田政矩（1797～1859）は名古屋の医師，弘化元年（1844）に尾張藩医となる。

[注2] 去年＝昨年，すなわち「嘉永5年，曾吉79歳」のときらしい。→資料E-f

[注3] 父も祖父も「伝吉」を用いたので，記述が混乱している。資料Bを参照。

[注4] この記述からは安永3年（1774）2月20日生となるが，別資料（→資料B-注2）では，3月4日生とする。八十・八十九の賀会が3月に開かれている（→表1）ので，3月4日が正しいと思われる。

- B 「小栗曾吉之孫訪問之記」, 資料①-1: 新出資料。長文だが, 曾吉の祖父・父母, 八十・八十九の賀宴, 没年月日・法号・菩提寺などについての最重要資料。

「小栗曾吉之孫訪問之記」, 伊藤篤太郎記 [注1]

明治三十五年(1902)八月十五日……父君〔伊藤^{ノブキチ}延吉〕ト同伴シテ, 曾吉ノ子孫ノ家ヲ訪ヒ, 以テ曾吉ノ逸事ヲ聞カムモノヲト, 午後ヨリ本町通大須ヘ入ル角ヨリ南ヘ行ク事, 凡一丁ニシテ, 此度ビハ大須トハ反対ニ左ヘ曲ル横町アリ。コレヲ一丁程行キテ, ツキ当リ, 夫レヨリ鈎ノ手ニ曲リテ五六軒行ケバ……門前町^(ママ)三百八百三番戸 小栗光義ト標セリ。……

此家ノ内ニ入レバ, 見世ノ六畳ニテ仕立物商売ト見エ, 此家ノ妻女ナルベシ, 五十近キガ, 娘ト見ユル二人ノ女ヲ相手ニ, 前ニ大ナル仕立物ノ台ヲスエテ仕事ヲナシ居タリ。予等, 来意ヲ告グレバ……五十余歳トモ覚ユル坊主頭ノ男……出デ来リテ挨拶ス。

此者ハ曾吉ノ孫ニ当ル小栗光義ニシテ, 即此家ノ主人ナリ。……夫レヨリ次ノ一室ニ案内セラレテ, 曾吉採葉ノ像ヲ写セル掛物一幅ト, 又曾吉九十才賀ノ時ノ掛物一幅ト, 外ニ曾吉ノ日頃愛玩シ諸山跋涉ノ節必ズ携ヘ行キタリト云ヘル, 褐色トナリ, 且漆ヲヌリタルガ如ク光沢ヲ発セル瓢^{ヒサゴ}一個ヲ出シ示ス。

曰ク, 曾吉ノ遺物ハ唯此三品アルノミ。他ニ, 先年迄, 押葉アリシカド, 虫喰ヒ環リ, ボロボロトナリタルガ故ニ, 取捨テタリ云々。

曾吉肖像ノ掛物ハ, シケ表装〔粗絹^{アラ}を用いた表装〕トナシ, 箱ノ内ニ蔵シテアリ。箱ノ蓋ニハ, 表ニ「高雅筆(森高雅〈画家〉ナルベシ)ノ山樂翁八旬齡, 採葉肖像之図ノ小栗伝蔵」。又ソノ裏面ニハ, 「嘉永六年丑三月十七日, 桜之町法導院おみてノ本草鉢物大会ノ嘉永六年丑より明治十六年迄, 卅一年」, 右ノ如ク記シアリ [注2]。

又, 内ナル掛物ノ卷止メニハ, 「山樂小栗曾吉翁像 云々子輯成」トアリテ, 此幅ニハ, 曾吉ノ採葉ノ旅装ニテ, ワランジヲ穿テ, 背ニハ採草之籠ヲ掛ケ, 内ニ天麻〔オニノヤガラ〕ニ株ヲ入レタリ。又, 手ニハ, 白山ニテ発見セシ「キヌガササウ」ヲ携ヘ, 腰ニハ愛翫ノ一瓢ヲ着ケ, 山路ヲタドリツ、アルノ状ヲ顕ハセシモノニシテ, 高雅ノ筆ニナレリ。

上ニハ大河内存真・伊藤圭介其他, 曾吉ノ殊ニ愛顧ヲ受ケシ諸本草家ノ詩等ヲ賛トシ, 図ノ下ニハ漢文ニテ曾吉ノ略伝ヲ記シアリ [前頁資料Aか]。図ハ着色ヲ施コシ, 白髪ノ老翁音容活ケルガ如シ。

又, 他ノ一幅ハ箱ナク, フスブリテ黒クナリ居レリ。卷止ニハ, 「万延三年亥, 小栗曾吉九十才節, 鉢物大会ニ付」〔この年・歳は誤り〕ト記シアリテ, 内ヲ開キ見ルニ, 曾吉八十九歳賀筵ノ節, 嘗百社ニテ出版セル白山産「イヌシデ」, 御嶽産「チングルマ」, 熊野産「イチヤウラン」三品ノ着色図ニシテ, ソノ上ニ「関「薜荔菴大窪先生写真図巻」, 有「花戸山樂曾吉老人所採「来草木」若干上。今就「其図中」, 摸「写三品」, 以賀「老人八十九歳之寿誕」云, 文久二年壬戌春三月, 尾張嘗百社」トアルモノ [前頁資料④・29頁の図1がこの刷物, 返り点は篤太郎による]ヲ基礎トシ, 此印刷図ノ周囲ニ曾吉ノ日頃愛顧ヲ受ケシ本草諸家其他諸氏ノ画・詩・歌等ヲ, トコロ狭キ迄記入シアリテ, 幅ノ上端ニハ, 左ノ二枚〔次頁〕ノ書付ヲ貼附セリ。

<p>志水池町 家持 伝蔵父 曾吉 今長寿日出度者ニ被 思召候付鳥目五百文 被下置候 安政十亥 正月</p>	<p>大津町 伝蔵父 曾吉 今長寿日出度者ニ被 思召候付鳥目五百文 被下置候 元治二丑 正月</p>	<p>(注) 原文では左の書面の年を「安政十亥年」とするが、そのような年は無く、文政十亥年ならあるが、年齢54歳で、長寿とも言えない。疑問が多いので、この左書面は資料に用いない。</p>
--	--	---

蓋シ、尾藩主ヨリ下賜アリシ目錄ニシテ、曾吉生前ノ名誉トシテ感佩セシモノナラム。

又、賛ニハ、渡辺兵庫入道〔又日菴^{ユウジツアン}〕ノ左ノ如キ説ト、熊野産「トキワガキ」ノ図、同柿実ノ解剖図アリ……。〔常磐柿の説のほか、浅井九阜の詩と屹岳の和歌を挙げるが、省略した〕

又、三園神谷喜左衛門ノ御嶽産駒久佐〔コマクサ〕ノ画ハ、左ノ下ノスミニアリト「七十六叟三園」ト記シ、ソノ傍ニ大垣江馬活堂写幾那樹〔キナ〕ノ画アリ。

又、錦窠^{キンカ}先生〔伊藤圭介〕ノ紀州熊野産ノ「シ、ンラン」ノ図アリ……。

以上三遺品ノ外、別ニ他ノ遺品ハナキヤト問フニ、此他ニハ、唯今ハ何モ伝ハリテ居リマセント答フ。曾吉ノ出生死去年月如何ト問フニ……位牌二個ト手帳一冊トヲ出シ来リテ示ス。曾吉ノ戒名等ハ左ノ通り、記セリ。

「蓮台浄香信士 伝吉長男 俗名曾吉 好之 慶応元丑年六月十五日没 九十二才」

又、曾吉ノ父母ハ左之通、記シアリ。

「本光自觉信士 天保四巳年九月七日 伝吉 九十才」

「円室智鏡信女 文政七年甲申五月二日 伝吉妻 いよ」

(位牌ニ、明治三年午出来、伝蔵作之、トアリ)

又、右伝吉父モ、矢張伝吉ト云ヒ、即チ曾吉ノ祖父ニ当ルモノナリ。此者、美濃国^{カニ}可児郡ヤトウ〔矢当〕村・字清蔵屋敷ト云ヘルトコロニ住居シ居タリシガ、尾張藩へ菓草掛植木屋ニテ召出サレ、名古屋へ転住シ来レルナリ。此者ハ即チ、

「生山玄空居士 安政〔安永〕二巳年十二月十六日 伝吉父 七十才」

ト云モノ、是ナリ〔注3〕。

此者ヨリ代々植木屋ニテ、名古屋ニ住居セシカド、曾吉ノ子、伝蔵ニ至リ、植木ヲ弄スルヲ好マズ、家業廃顔セシナリ。

又、曾吉ノ墓ハ何レニアリヤト問フニ、光勝院〔注4〕ニ埋葬シアリト答フ。光勝院ハ伊藤家代々ノ菩提寺ナレバ、奇遇ナリト思ヒ、小栗ノ家ヲ辞シテ光勝院ニ至リ、墓地ニ行キ見レバ、果シテ小栗氏代々ノ墓アリ。然ルニ蓮台浄香信士〔曾吉〕ノ墓碑ハ頓^トント見当タラズ。……住職ニ質ヌルニ、小栗氏ハ光勝院当処へ移り来リシトキヨリ既ニ一緒ニ来レル檀家ニシテ、最モ古キ檀家ノ一ナリト謂ヒ、又曾吉ノ埋葬ノ節ハ他ノ棺ノ上ニ重ネテ埋葬セルモノナルヤニ聞キ

居タリト申サル。

実ニ、本邦ノ博物学ノ進歩ニ就キテハ、植木屋曾吉ノ如キ亦預テ功劳少カラズ。而シテ、ソノ人ノ瑩域^{エイイキ}〔墓所〕、殆ンド湮滅ニ帰セントスルガ如キハ、実ニ遺憾ニ堪ユベケンヤ。

明治三十五年〔1902〕八月十六日、記シ終ル。

〔附記〕別紙〔D〕ハ小栗曾吉ノ伝ヲ取調べ、之ヲ不朽ニ伝ヘ置カントノ意ニテ、十数年前、錦窠先生ノ余ニ談話セラレ、余ノ直ニ筆記シ置ケルモノナリ。茲ニ参考ノ為、附綴シ置リ。

〔注1〕伊藤篤太郎^{トク}は、伊藤圭介^{ノブキチ}の養子延吉の子、圭介の孫。圭介の後継者で、植物学者。

〔注2〕この箱書は資料②に詳記されている——「花戸老翁曾吉山中採集図、高雅筆、伊藤圭介先生題／安永三年午三月四日出生、山楽翁八旬齡採葉正像之図。嘉永六年丑三月十七日、桜之町法導院於テ、本草諸鉢物大会、嘉永六年ヨリ明治十六年未迄三十一ヶ年」。一方、『諸家雑談』(→16頁、資料⑤-3)には、「曾吉当年八十歳……今春、城南徳林寺にて賀筵を開く」とあり、別の宴もあったらしい。

〔注3〕原文には「安政二巳年」没とあるが、安政2年は卯歳だし、父伝吉の没年などと合わない。「安〇二巳年」に該当するのは、「安永二巳年」だけである。

〔注4〕光勝院、名古屋市中区大須3-26-14。

●C「口演」、資料①-2、一枚刷：新出資料。原文通りに改行、句読点・濁点も付さない。文中「八十九歳」とあるので「戌」は文久2年(1862)であり、その4月4日に、門前町阿弥陀寺で鉢物大会を開くという案内状である。子息伝蔵が曾吉を襲名したこともわかる。「口演」は「口上」のことか。

口 演

各様益御機嫌克可被遊御座奉思寄候
然ハ祖父伝吉儀明和三戌年ヨリ植木職ニ而
九十歳迄渡世仕引続父曾吉儀も当年
八十九歳相成申候御蔭を以四方之顧御引立て
相続仕来候段難有仕合奉存候随而此度
賀之祝として一世一代艸木並諸鉢もの
大会仕度来ル四月四日門前町阿弥陀寺
おゐて不抛晴雨競合相催申候付何卒
御所持之銘品御保養かたがた為御持
御光来偏ニ奉希上候

名古屋

植木屋曾吉事

戌二月

山楽

倅 伝蔵事改名曾吉

会主

取持 惣植木屋中

●D 「曾吉之伝、取調ノ事」、伊藤圭介口述、伊藤篤太郎筆記：資料③、新出資料

従来此者ノ由緒ハ、名古屋本町下^{シモ(ママ)}、寺ノ角^{カド}ニテ、数代ノ植木屋ナリ。有名ノ曾吉ニ至テ、植物至テ嗜ムトコロニシテ、御嶽、駒嶽、白山、伊吹山、熊野等ノ諸高山ニ自ラ採集シ、随テソノ採集ノ内ニハ、新發明 [=新発見] ノ品、極メテ多シ。水谷翁モ此者ニ抛リテ發明シ、新考ヲ得ルコト最多シ [注1]。其精シキニ至テハ、圭介嘗テ伊吹山ニ伴ヒ行キシニ、此処ニハ「コバイモ」アリト、直ニ教示スル等ノコト多シ。大垣ノ飯沼翁モ此曾吉ニ依リテ、ソノ教示ヲ受ケ、發明セラレシコト、亦甚ダ多シ。此曾吉、晩年、清水町 [志水町?] ヘ転居セシナリ。其倅、亦伝蔵ト称シ、曾吉ニ随ヒ諸高山ヘ登リ、頗ル珍草ノ産地ナド覚ヘ居リシナリ。然トモ其性、親ノ如ク草木ヲ嗜マザレバ、追テ植木屋ヲ廃業シテ、名古屋袋町ニ転居シ、薪屋ナドヲ業トセリ。其後ハ如何ナリシヤヲ知ラズ。

曾吉ノ伝、大略斯ノ如シ。学士会博物家履歴 [注2] ニ附録シ登録シ置キ度人物也。尚ホ遺漏ナドハ、嘗百社中諸君ニ之ヲ聞テ増補シ置度事也。

明治廿三年十二月五日 伊藤錦窠先生口述 伊藤篤太郎筆記

[注1] 水谷助六(3代目)の「円葉オモト」(『錦窠翁九十賀寿博物会誌』に所収)には、「曾吉……祖父水谷豊文翁ニ從ヒテ毎年必ズ諸国高山ヲ跋涉シ、植物ヲ採集セリ。又、加州白山ヘモ俱ニ登リシコトアリト云フ」と記す。

[注2] 伊藤圭介、本邦博物起源沿革説、『東京学士会院雑誌』、第1編第3冊・第4冊。

●E 曾吉に関するその他の情報：a～c、資料⑤-4～6 / d～g、磯野が追加

- a 飯沼慾齋『草木図説・草部』巻18・丁50ウ、チドリサウ、一名テガタチドリ条：「花戸曾吉、駒嶽ニ得テ、自ラテガタチドリ [手型千鳥] ノ名ヲ下ス」：掌状の根による命名
- b 伊藤圭介『錦窠植物図説』・草部④九、チドリサウ：「曾吉、駒嶽ニテ自ラテガタチドリノ名ヲツク。ハンドケンス・コロイドノ名ニ符」
- c 丹波修治『丹波退翁博物雑記』：「植木屋曾吉、白山採集目録并ニ南紀産アリ。……通計八十六品ノ名称ヲアグ」
- d 文政3年(1820)、大窪昌章が伝吉・曾吉父子から熊野産草木10品を入手(昌章草木集、国会図書館：昌章の草木入手記録)。
- e 天保元年(1830)7月、大窪昌章が曾吉から、白山産草木34品を購入(昌章草木集)。
- f 「嘉永五年四月廿日出杖、嘗百社社友吉田平九郎、富永武太夫、其他三四ノ友人ニ^{シヨウヨウ}懲遯シ、豚児圭造(初名哲太郎、後改圭造、名清哲、時ニ、十八才)、花戸曾吉(七十九)ヲ伴ヒ、伊吹山ニ採集ス。予メ飯沼慾齋(七十才)ニモ約シ置ク。大垣ニ宿シ、翌朝、飯沼、同伴ス……」(長谷川旧蔵「大窪昌章関係資料」中の圭介メモ)。
- g 嘉永6年(1853)8月26～28日、西村広休の伊勢国飯高郡堀坂山^{ホツサカ}採集に、曾吉および子息伝蔵が同行した(西村寒泉採集記、国会図書館)。

表1 小栗曾吉年譜(資料F):資料A～Eなどに基いて、新たに作成した。

和暦(西暦)	歳	記事:【 】内は資料番号・出典
宝永元年(1704)		祖父伝吉生まれる。美濃国可児郡 ^{アトウ} 矢当村・字清蔵屋敷の名家で、小栗一族の 本家だったらしい【A, B】。
?		祖父伝吉、尾張藩薬草掛植木屋に召出され、名古屋に移住する【B】。
延享元年(1744)		父伝吉、生まれる【B】。
明和3年(1766)		父伝吉、植木屋となる【C】。本草を水谷豊文などに学ぶ【A】。
安永2年(1773)		12月16日、祖父伝吉没、70歳、法号生山玄空居士【B一注3】。
安永3年(1774)	1	3月4日、小栗曾吉、誕生。伝吉の長男、母は <u>いよ</u> 。名は好之、通称は曾 吉、号は山楽、水谷豊文に本草を学ぶ【B, B一注2, A一注4も参照】。
享和2年(1802)	29	2月、曾吉、尾張藩の薬園掛となる。西は讃岐・阿波、東は下野まで遠近 30国で採薬。加賀白山に13回、播磨池田に33回も訪れた【A】。
文政3年(1820)	47	4月19日、曾吉、紀州奈知山(那智山)へ採薬に向かう。5月11日、名古屋 へ戻る【吉川著作集、265頁】。→E-d
文政7年(1824)	51	5月2日、母 <u>いよ</u> が没する、享年不明。光勝院に葬る、法号は円室智鏡信 女【B, B一注4】。
天保元年(1830)	57	夏、曾吉、白山で採薬か【E-e】。
天保4年(1833)	60	9月7日、父伝吉が没する、年90。光勝院に葬る、法号は本光自覚信士 【B】。
嘉永5年(1852)	79	4月20日より、伊藤圭介らに同行して伊吹山に採薬。【E-f】
嘉永6年(1853)	80	3月17日、曾吉80歳の賀会として、伊藤圭介ら旧知の人々が、桜之町法導 院において本草諸鉢物大会を開く【B, B一注2】。 春、城南徳林寺で曾吉80歳の賀筵を開く。この頃、曾吉は志水町に居住し ていた【資料⑤-3の『諸家雑談』による】。 8月26～28日、西村広休と伊勢国飯高郡堀坂山 ^{ホツサカ} に採薬。子息伝蔵も同行 【E-g】。
文久2年(1862)	89	3月、嘗百社、曾吉89歳を祝う一枚刷を刊行【B, 29頁図1】。 4月4日、曾吉89歳の賀会として、門前町阿弥陀寺で鉢物大会を開く。会 主は惣植木屋中。伝蔵は曾吉の名を継ぐ【B, C】。
慶応元年(1865)	92	1月、長寿を祝って、尾張藩主から五百文を下賜される。この頃、曾吉は 大津町に住んでいた【B】。 6月15日、小栗曾吉没する。光勝院に葬る、法号蓮台浄香信士【B】。 跡を子息伝蔵が継ぐが、植木職を好まず、薪屋に転じた【D】。
明治35年(1902)		8月15日、伊藤篤太郎が、伝蔵の子息、曾吉の孫で仕立物屋を開いていた 光義を訪問、曾吉の遺品を調べ、祖先・父母について質問、菩提寺光勝院 を訪れる。伝蔵*はすでに没していたようである【B】。

* 伝蔵は明治11年(1878)に博覧会で談話しており、健在だった(丹波修治、丹修博物記、冊7、国会図書館)。

第2節 「嘗百社来歴」(資料G, 筆写)

- 嘗百社に関する重要な新出資料。長谷川資料に写しが3点存在するが、ここでは後記が詳しい丹波修治写「嘗百社之事并履歴書」所収のものを用いた。
- 末尾の丹波注記から、「嘗百社来歴」は戸田寿昌が大河内存真に執筆を頼んだとわかる。一方、伊藤篤太郎写「嘗百社来歴」の後記には「篤、明治十四年三月写。存真様、二三日前、御認」とあり、存真の「嘗百社来歴」執筆は明治14年(1881)3月らしい。
- 文章の比較から、伊藤圭介の「沿革」(→15頁)は、この「嘗百社来歴」を全面的に用いて執筆されていることが判明した。

嘗百社来歴

本藩、本草ヲ唱フル松平君山ノ後、文化ノ頃、本草会ト称シテ、浅野春道(号、鵲巢、蘭山ニ親炙ス)・水谷助六・大窪太兵衛・岡林清達・柴田洞元(号溶々斎、日用薬品考ヲ著ス)・西山玄道(重敦、本生父)・浅野文達ノ外、許多会セリ[注1]。薬物ヲ携来リ、鑑定シテ、中・不中ヲ競フ。又、本草綱目ヲ読ムコトモアリ。薬戸ノ山口喜兵衛ナルモノ、舶齋ノ薬ヲ櫃内ヨリ撰ミ出シテ其日ノ出品トス(仮令バ麻黄ノ櫃内ヨリ麻黄ノ実、又雑草ノ混ズル類)。余、弱冠ノ時、其席ニ臨メリ。其后ハ、水谷助六・石黒濟菴・伊藤瑞三・大窪太兵衛・余等、其会ヲ継テ、本草ノ業ヲ考究シ、輪会スルコトナリ、大窪宅ニハ毎月十七日ニ会ス[注2]。其内、后ニハ吉田平九郎・大窪舒三郎(太兵衛ノ男)・伊藤圭介等モ入りテ盛ナリ。博物会トテ、寺院、又ハ自宅ニ時々設ケリ。此ハ文政ノ頃ニシテ、此時初テ嘗百社ノ名ヲ命ズ(社名ハ余、命ズ。箆子[注3]モ亦撰メリ)。其内、水谷義三郎(助六ノ義子)・松井信一等モ入レリ。此末ハ、信一ニ尋メ可シ。大河内存真(名重敦、字子厚、号還諸、又更生子、八十六年)

[付記1] 此頃、詩経名物ノ会ヲ覚正寺ニ開ケリ。又、互ニ金ヲ出シテ、天工開物・群芳譜等ヲ置コトアリ(覚正寺ハ本町^(ママ)丁目ニテ、笙ノ笛ヲ能ク奏スル人ナリ)。

[付記2] 太兵衛曰、十七日ハ昔ヨリ本草ニ会スル日ナリト。其委キコトハ不詳ドモ此ヨリ先キ、陽巖院(惣見寺ノ子院)、柳葉師ノ僧、水谷覚夢(助六ノ父)植物ヲ好ミテ会スルコトアリ。其日ハ十七日ナルヤ。[注4]

[丹波後記]「右ハ嘗百社ノ履歴ニテ、戸田氏、大河内老人ニ頼ミ、認モロウタルモノヲ写シ置也。[明治]十四ノ四月八日」[朱筆]

[注1] 伊藤篤太郎写「嘗百社来歴」では、本資料の「付記1」を頭注として、この辺に置く。

[注2] 伊藤篤太郎写「嘗百社来歴」では、「付記2」を頭注として、この辺に置く。

[注3] 丹波修治写「嘗百社之事并履歴書」の「嘗百社交流申入状」(次節の資料H)写しの末尾に次文がある——「此箆子ハ大河内存真氏ノ撰ニシテ、一枚摺ノモノナリ。明治十四年四月八日、愛知ニテ戸田ヨリ借覧、写置」。これによれば、本個所の「箆子」が上記の「嘗百社交流申入状」を指すことが明らかである。

[注4] 「嘗百社 昔ハ一日・七日・十一日・十七日・廿一日ハ本草会ナリ。故ニ、一七二、末ノ七ナシ本草会ト云フ向モアリシ」(伊藤篤太郎のメモ、「嘗百社」：新出資料)

第3節 「嘗百社交流申入状」(資料H)

- 木版一枚刷で、前々から知られている資料。本資料は無題のため、「尾張嘗百社出品勧誘状」「本草会出品依頼状」などと従来呼ばれてきた。しかし、内容は博物館への出品勧誘ではなく、広く交流を求める趣旨なので、ここでは「嘗百社交流申入状」と呼ぶ。「嘗百社」の名を決めて旗揚げしたときに、作成・配布したと思われる。小西正泰のいう「趣意書」(『虫と本と人と』、創森社、428頁、写真あり)は、これに当たる。
- この一枚刷には原著者名も無いが、長谷川資料中の丹波修治転写本には「此^{サツシ}笥子ハ大河内存真重敦氏ノ撰ニシテ、一枚摺ノモノナリ。明治十四年四月八日愛知ニテ戸田〔戸田寿昌〕ヨリ借覽、写置」の後書があり、大河内存真が著者と判明した。
- 以下の翻刻は長谷川資料中の一枚刷に基き、^{コト}「コト」以外の合字は開いた。

余党本艸ノ学ヲ嗜ム。然ルニ名物ヲ査訪スル^{リョウカン}コトハ、^{ヘンロウ}両間万類ノ繁キ諸国ヲ跋涉・広搜・遍採スルコトヲ得ズ、寡聞^{ヘンロウ}偏陋ナルヲ、イカンセン。竊ニ以テ一大恨事トス。因テ已ムコトヲ得ズ、敢テ此^{サツシ}笥子ヲ以テ、茫昧ニ海内博物ノ君子ヲ煩ハシテ、同好ノ交ヲ通ジ、聞見ヲ弘メンコトヲ乞フ。伏テ願クバ、区々ノ志ヲ照察シ、左方ニ列スル件々ヲ示ンコトヲ許シテ、後ニ附スルトコロノ帛〔=紙〕ニ記録シテ即便ニ贈リ賜ヘ。大庇^{タイヒ}万々ナラン。余党モ亦一得ノ説ヲ呈シ、斤正〔=斧正〕ヲ請ヒ、或ハ本藩近地ノ産物ヲ采送センコトヲ欲ス。幸ニ偃蹇スルコトナカレ。是、俸ル。

- 一 草木金石虫魚禽獸ノ類、其産地(某国某郡某村ニ、或ハ某山某川)方言並ニ形状ノ説、或ハ図又培養ノ法等(但薬物ヲ初メ、食用トナスベキモノ、救荒ニ充ツベキモノヨリ、器材民用ニ至ルマデ)。
- 一 其方土ニ因テ経験ノ功アルモノ、或ハ有毒ノモノ(附解毒ノ方)。
- 一 諸家珍藏スル所ノ奇物異品ノ名目。
- 一 薬物ノ真贋ヲ弁ジ、優劣ヲ択ムヲ初メ、和産アリテ漢名詳ナラザルモノ、漢名アリテ和産詳ナラザルモノ、又和産アリテ和漢名詳ナラザルモノ等ヲ新ニ發明〔=発見〕スルノ説、且ツ先輩定ムル所ノ漢名或ハ議スベキモノアリ、是ヲ訂正スルノ説、ソノ他、清俗ノ名、啁蘭〔=和蘭〕訳述ノ説ニ至ル。
- 一 本艸名物ノ学ハ多識ヲ以テ参合スベシ。但産物多クハ其風土ニ因テ形状一ナラズシテ質ニ良^{コト}楷アリ、又彼ニ在テ此ニ無モノ多シ。因テ四方ノ異聞ヲ得テ、務テ浩博ニ從ンコトヲ欲スレバ、其説ノ贅ナランコトヲ恐レテ鴻教ヲ吝ムコト勿レ。薬物功能ニ限ラズ、奇草珍木及ビ金石虫獸希有ノ品、又他ノ聞見ノ説、蝦夷・朝鮮・琉球・諸異邦ノ産ニ至ルマデ。
- 若シ幸ニ其実物ヲ賜フコトアラバ、榮望外ニ^{コト}踰ン。ソノ品ハ、艸木 薬品ヨリシテ、菜穀、又欣賞ニ属スルモノ、其他小草雜木ニテモ珍奇ナルモノ、近クハ根ヲ采送センコトヲ欲スレドモ、遠路ニシテソノ便ヲ得ザレバ、

葉腊 (花実ヲ具フルヲ佳トス)

実 (ヨク熟スルモノヲ采テ, ソノ下種ノ時月ヲ示セ)

金石 化石ノ類, 土或砂ニ至ルマデ。

虫魚 虫ハソノ背ノ正中ヲ布鍼^{ヌノバシ}ニテ刺シ, 魚ハ日乾スベシ。

介

禽獸 ソノ腹ヲ剖シ腸ヲ出シ, 肉ヲ剥ギ去リ, ソノ内ニ枯礬 [焼明礬]・石灰等ヲ摻シ,
苧麻 [カラムシ], 或綿ヲ填テ合縫スルノ法アリ。能, 遠ニ致シ, 久ニ堪ユベシ。然
トモコレヲ煩ハスヲ憚ル。只ソノ翅毛角距ニテモ, 得ンヲ乞フ。

石黒正敏

吉田高憲

尾藩 嘗百社

水谷豊文

大窪昌章

大河内重敦

伊藤舜民

第4節 嘗百社の歩み

第2節の「嘗百社来歴」(資料G)や, 第3節「嘗百社交流申入状」(資料H)の転写者後記は, 嘗百社の前史やその成立に新しい情報を含むし, ほかに「文久癸亥本草会課題」(資料K)などの新出資料もある。本節では, これらの資料を用いて, 本草会時代・嘗百社の誕生と活動・幕末期の嘗百社に分け, その歩みを整理しておくことにしたい(注記➡30頁)。

(1) 本草会時代

尾張の本草学や園芸は, 江戸・京都のそれに比して軽視されてきた嫌いがあるが, 実際には古くからかなりの発達を遂げていたようである。その一つの証拠は, 尾張本草学の開祖といわれる三村森軒^{ミムラシケン}が, 日本最初のアサガオ専書『朝顔明鑑鈔』を, 享保8年(1723)という早い時期に著していることだろう[注1]。また森軒は, 元文5年(1740)閏7月~8月に木曾の全域を廻って採集している[注2]が, これは後年の嘗百社員の活動の先駆だった。

森軒に次いで, 松平君山が現われる。弟子は多く, その一人横井時敏は18世紀中頃に優れた園芸書『嘉卉園随筆』を残したし, 水谷豊文の父覚夢や, 大河内存真の3代前にあたる大河内重昌も君山に学んだ。

資料G「嘗百社来歴」は, 「文化ノ頃……浅野春道・水谷助六[豊文]・大窪太兵衛・岡林清達・柴田洞元・西山玄道[大河内存真および伊藤圭介の実父]・浅野文達・大河内存真」などが「本草会」と称する会合を開いていたと記す。薬物を鑑定して的中するか・外れるかを競うという意味では一種の遊びの要素の伴う会だったらしいが, 「本草綱目ヲ読ムコトモアリ」と, 本草学習の面ももちろん持ち合わせていた。ほかにも, 「詩経名物ノ会」が開かれたり, 陽院の住職・柳薬師ノ僧・水谷覚夢(豊文の父)など, 植物を好む者が集まる大同小異の会もあ

つたらしい。これらの集会在、嘗百社につながった。

尾張博物家の特色の一つは、たびたび採葉に出かけていることであるが、それを表2(次頁)にまとめておく。これからわかるように、水谷豊文は上記「本草会時代」の文化初年から、大窪昌章や伊藤圭介は文政の初期から、たびたび遠方にまで採葉に出ている。京都・江戸の博物家が遠くまで採葉に行く回数が少ないのと、対照的である。

京都では鞍馬や比叡山・伊吹山などを除けば周辺に優れた採集地が少ないし、江戸の幕臣たちは行動に厳しい制約があった。それに対して尾張は、北方に木曾・美濃、南方に伊勢・志摩・熊野が控える地の利があり、藩士の行動に対する制約も比較的緩やかと恵まれていた。それが、度重なる採葉を可能にした。ともあれ、この特色は嘗百社に引き継がれる。

(2) 嘗百社の誕生と活動

資料G「嘗百社来歴」や「沿革」によると、水谷豊文・石黒濟菴・伊藤瑞三・大窪太兵衛・大河内存真などが上記本草会を継承して「7の日」に回り持ちで各人宅に会合(毎月17日は大窪宅)するようになった[注4]。明記されてはいないが、世代交代のほか、採葉などで動植物への関心が高まって学究的になったこと、尾張博物家の大きな特色である蘭学の導入などが新しい動きをもたらしたように思われる。

間もなく吉田雀巢庵・大窪昌章・伊藤圭介・神谷三園らが加わり、博物会も開くようになった。それが文政の頃で、大河内存真がこの集まりを「嘗百社」と命名し、また「嘗百社交流申入状」(資料H:情報・資料の交換を、他国の博物家に呼びかける内容の文)も記したのだと存真自らが語っている[注5]。

「嘗百社」の命名が何時かは明確ではないが、文政10年(1827)3月・9月の薬品会には嘗百社の名は使っていない。一方、「沿革」には「此同志ノ集会ヲ大河内氏、嘗百社ノ名ヲ命ゼリ。出品ニハ各自ソノ発明[発見]・新聞[新知見]・創見等ノ図説ヲ出シ、互ニ品評シ、此図説ヲ綴リテ灌園余課ト称セリ」とあるが、この「灌園余課」について『吉川著作集』(8頁)は文政11年(1828)の執筆と記す。これらの記述を合わせると、「嘗百社」の命名は文政10年か11年頃という可能性が高いと思う。

もともと、嘗百社は確固たる組織を持っていた訳ではなく、会頭とか会主のような役職は置かれなかったらしいし、盟約・規則などの資料も伝わっていない。大河内存真の「嘗百社来歴」(資料G)にも、そのような記述はまったく無い。嘗百社員の名簿の類も知られていないようである。

もちろん中心となったのは、一般に言われるように、経験に富む水谷豊文に間違いのないだろう。嘗百社は、その豊文を軸とし、志向を同じくする人々が緩やかに連帯したグループと言うあたりが適切な表現ではないだろうか。

嘗百社は、設立の頃からたびたび薬品会・物産会を開いた(表3)。開催の年月不明で所収していない博物会が他にもある[注6]が、江戸の幕府医学館や京都の山本読書室物産会がほぼ毎年開会したのとは異なり、折を見て開くという傾向がうかがえる。

表2 嘗百社員などの採薬行〔注3〕

文化2年(1805)	4月～5月	伊勢国・近江国	水谷豊文
文化3年(1806)	4月10日～23日	美濃国七山根廻り	水谷豊文
文化4年(1807)	4月5日～5月4日	木曾	水谷豊文
文化5年(1808)	7月23日～8月1日	近江国伊吹山	水谷豊文
文化6年(1809)	4月	尾張国知多	水谷豊文
文化6年(1809)	7月	美濃国～北伊勢	水谷豊文
文化7年(1810)	6月24日～7月27日	木曾御嶽山・東美濃	水谷豊文
文化8年(1811)	4月9日～5月8日	南紀・熊野浦・和歌浦	水谷豊文
文化13年(1816)	5月15日～6月6日	勢州 ^{アサマ} ・朝熊山・賀田浦	水谷豊文
文化14年(1817)	8月17日～9月下旬	大和国・摂津国・山城国	水谷豊文・丹羽松斎
文政3年(1820)	4月19日～5月11日	紀州那智山	小栗曾吉
文政4年(1821)	7月	越前国白山	大窪昌章
文政5年(1822)	3月頃	美濃国金華山	大窪昌章
文政5年(1822)	8月	知多郡 ^{ウツミ} 内海 ^{ヒマカ} ・日間賀 ^{ヒマカ} ・三河	水谷豊文・伊藤圭介
文政5年(1822)		山城・摂津・大和・伊勢	伊藤圭介
文政6年(1823)	3～4月頃	伊勢国多度山 ^{トウゴク} ／東谷山	大窪昌章
文政9年(1826)	5～6月	美濃国郡上八幡 ^{グジヨウ}	大窪昌章
文政11年(1828)	4～6月頃	尾張国龍泉寺山・東谷山	大窪昌章
文政12年(1829)	5月	伊勢国多度山 ^{トウゴク} ／美濃国養老	大窪昌章
文政12年(1829)	7月	加子母 ^{カシモ} ～御嶽山	岩屋平右衛門・相原駒吉
天保元年(1830)	夏	越前国白山	小栗曾吉
天保2年(1831)	6月4日～10日	近江国伊吹山	大窪昌章・相原駒吉
天保3年(1832)	4月～6月	信州長野・戸隠山など	伊藤圭介
天保4年(1833)	6月17日～18日	美濃国高須山・山崎山	大窪昌章
天保7年(1836)	4月24日～5月3日	美濃国錦織山 ^{ニシゴリ} ・恵那山	大窪昌章
天保7年(1836)	7月27日～8月17日	加子母・御嶽山・継母嶽	大窪昌章
天保9年(1838)	5月～7月	木曾・戸隠山など	伊藤圭介
天保11年(1840)	9月23日～10月11日	木曾	吉田雀巢庵
弘化2年(1845)	6月18日～7月10日	木曾・駒ヶ嶽	大河内存真・吉田雀巢庵
嘉永5年(1852)	4月20日～4月末	近江国伊吹山	伊藤圭介・飯沼愨齋*
嘉永6年(1853)	8月26～28日	伊勢国飯高郡堀坂山 ^{ホツサカ}	西村広休・小栗曾吉など
安政2年(1855)		伊吹山／朝熊山・志州青峯	伊藤圭介
安政5年(1858)	5月	伊勢国孤野山 ^{コノノ}	伊藤圭介など17名
万延元年(1860)	閏3月	犬山近辺	松井丹右衛門など10名
文久3年(1863)	4月12日～14日	朝明郡田口村福尾山	丹波修治・丹波周伯など

* 伊藤圭造・吉田雀巢庵・富永武太夫・花戸曾吉なども同行。➡資料E—f

表3 嘗百社系博物会

開催年月日	会名	開催地	備考
① 文政10年(1827) 3月15日	薬品会	修養堂(圭介宅)	尾張で最初の博物会
② 文政10年(1827) 9月15日	本草会	生濟堂(存真宅)	
③ 天保3年(1832) 9月1日	薬品会	修養堂(圭介宅)	
④ 天保6年(1835) 3月15日	本草会	城南一行院	水谷豊文追薦、『乙未本草会物品目録』刊
⑤ 嘉永元年(1848) 3月15日	薬品会	修養堂(圭介宅)	
⑥ 安政5年(1858) 4月23日	博物会	旭園(圭介別業)	桜齋居士(圭介長男)追薦
⑦ 万延元年(1860) 3月25日	博物会	七ツ寺	吉田雀巢庵追薦
⑧ 文久元年(1861) 3月25日	博物会	旭園(圭介別業)	
⑨ 文久2年(1862) 3月25日	博物会	旭園(圭介別業)	圭介は江戸蕃書調所勤務中
⑩ 慶応2年(1866) 月日不明	物産小会	遊心庵	遊心庵は圭介宅の別棟
⑪ 毎年1月25日：天保8年(1837)～安政6年(1859)	博物会	吉田雀巢庵宅	嘉永元年・2年・安政2年は記録が無く、休会か

なお⑩は、長谷川旧蔵「尾張医家本草関係者名簿」(未定稿)中の4名の注記に「慶応2年遊心庵物産小会出席者」とあり、遊心庵は伊藤圭介の居宅(名古屋市呉服町)の裏続きにある4階建の棟の名称(吉川著作集, 106・130頁)なので、嘗百社系物産会の一つとして加えた。

⑪は吉田雀巢庵が個人的に開催した展示会で、古器物・古瓦・古貨幣・藩札などの出品が多く、嘗百社の博物会とはやや異質だが、参考のために挙げた。

各人の活動、とくに採薬は活発だった。大窪昌章や水谷豊文など、嘗百社の人々はシダ類にとりわけ興味を示して採集したらしい[注7]が、その頃の命名が現在の和名にも生き残っている。トウゴクシダもその一つで、これは発見地の尾張東谷山(名古屋市と瀬戸市の境)に因む。フジシダは犬山の尾張富士(入鹿池^{イルカ}の西)、ホングウシダも同じく犬山市の本宮山(尾張富士の南：豊橋の北にある本宮山ではない)、オシャグジデングは木曾御社貢寺^{オシヤグジ}に由来するという(『牧野新日本植物図鑑』などによる)。

シダ以外では、志摩^{アサマ}の朝熊山に基くアサマリンドウの名や、菰野^{コモノ}稲森山に由来するイナモリソウの名が文化13年(1816)の豊文採薬記[注8]にすでに見えるが、ともに尾張の人々の採集地なので、その命名による可能性が大きい。

動物では、日本で最小のハッチョウトンボ(八丁蜻蛉)の発見と命名がある。大河内存真が文政9年(1826)にシーボルトに贈った「日本産昆虫図譜に関する説明書」(175種の昆虫を記録、図譜はいま欠)の石井宗謙蘭訳書に「ハッチョウトンボ……[尾張の]「ヤダノテツホウバハッチウメ」、すなわち矢田鉄砲場八丁目(現名古屋市東区矢田町)にのみ発見され、そのためにハッチョウトンボの名を有する」とあるのがもっとも早い記録と思われる[注9]。

石川八太の『虫譜』や吉田雀巢庵の『蜻蛉譜』にもハッチョウトンボが図示されており、こ

れらは現存するもっとも古い図の一つであろう。なお、雀巢庵の『蜻蛉譜』は同人著『蜂譜』とともに、江戸時代で一二を争う虫類図譜と評されている。

雀巢庵だけではない。嘗百社の人々の多くは虫類にも関心が深かったらしく、『大窪虫譜』や『水谷虫譜』『豊文虫譜』、同じく豊文の『虫多写真』もある。大窪昌章はとりわけその傾向が強かったか、シーボルトに『蛛類図説』（クモ）を献呈しているし、『乙未本草会物品目録』にはカタツムリやキセルガイ（当時は虫類のうち）45品を図示し、また号として「蝸牛菴」も用いた [注10]。この虫類への関心も、嘗百社の特色に数えてよいだろう。

尾張派博物家のお家芸に、印葉図の作成がある。印葉図は一種の拓本で、直接法（草全体や、花・葉、あるいは腊葉に直接墨を塗り、紙に写し取る：一般の魚拓と同じ）と、間接法（多少湿らせた紙を草や葉に被せて貼り付け、上から墨を含ませたタンポで叩いて輪郭や葉脈を浮かび上がらせる：墓碑などの拓本と同じ）がある [注11]。直接法の方が綺麗に仕上がるからであろうか、江戸時代の印葉図作成には直接法が多く用いられた。これは嘗百社の独壇場で、大窪昌章や水谷豊文、伊藤圭介はその名手として知られる。同一の標本から複数の印葉図を作れるので、10部程度であれば「出版」も可能であり、『真影本草』『本草真影』などと題した印葉図出版物も現に残る。一方、江戸や京都の博物家はこの手法をほとんど用いなかった。

一般には尾張の人々がキニホフの印葉図譜に倣ったとされるが、伊藤圭介は『錦葉翁耄筵誌』（八十賀記念誌）で、自家から出品した『幾尼福弗氏印葉本草』5冊の解説に、「幾尼福弗氏ハ西洋印葉ノ鼻祖ナリ。但、本邦先輩ノ印葉ハ之ヲ撰擬スルニ非ズ。自ラ暗合スルモノナリ」と模倣説を否定している。このコメントは従来無視されているが、尾張の独創を認めてもいいのではないかと。何もかも、新規のことは外国に由来すると決めつける必要も無いと思う。

(3) 幕末の嘗百社

この時期に嘗百社は、採葉で世話になり続けた花戸（植木屋）小栗曾吉に対して2度、その賀を祝って、長年の貢献に報いている。嘗百社自身の活動を見る前にそれに触れておきたい。

第一は嘉永6年（1853）3月、花戸曾吉の八十賀を祝って「花戸老翁曾吉山中採集図」を絵師の森 高雅が描き、曾吉に贈った。画題は伊藤圭介、画には渡辺又日菴・圭介・大河内存真・吉田雀巢庵・神谷三園・柳田政矩など、嘗百社内外の昔馴染みの詩が賛として書き込まれていた。おそらく、高雅とは竹馬の友だった圭介が高雅に頼んで曾吉の姿を描かせ、賛を加えて曾吉に贈ったのに違いない（資料B、B-注2）。残念だが、この画は行方不明である。

第二は文久2年（1862）3月で、曾吉の八十九賀のために、嘗百社は彩色一枚刷を刊行した（図1）。嘗百社の刊行したこの種一枚刷の類は他に知られておらず、異例なことだった。資料Bの本文に詳しく記されているが、この一枚刷の図は、曾吉と縁の深いイヌシデ・チングルマ・イチヨウラン（一葉蘭）を大窪昌章の原図から模写し、嘗百社の賛を添えたもの。名古屋の絵師、清水淇川画。小栗家で軸仕立てにして大切にしていた一枚刷には、八十賀のときの画と同じく、圭介・又日菴・浅井正賛・神谷三園・江馬活堂など旧知の人々の図・詩・歌が、余白に所狭しと加えられていたという（資料B）。



図1 嘗百社が花戸小栗曾吉の八十九賀を祝って出版した一枚刷，清水淇川画

さて、嘗百社の状況に話を移すと、同社の中心となった水谷豊文は天保4年(1833)に没し、ついで同社を支えていた大窪昌章も天保12年(1841)に40歳の若さで世を去る。天保年間には、浅野春道や石黒濟菴も逝去して、古参の会員は神谷三園・富永武太夫・大河内存真・伊藤圭介・吉田雀巢庵くらいになる。一方では、豊文を嗣いだ水谷義三郎、昌章を嗣いだ大窪安治をはじめ、大河内構斎(存真の子)・石黒通玄(濟菴の子)・戸田寿昌と若手が加わり、やや後には丹波修治・小塩五郎・田中芳男なども登場して、世代交代が著しかった。

安政5年(1858)5月、嘗百社は総勢17名(うち2名は社外)という多人数で、勢州菰野山において数日のあいだ採葉した。その折の参加者を記録した「尾張嘗百社同遊人名」[注12]に見える嘗百社のメンバーは一富永武太夫(64歳)・伊藤圭介(56)・吉田雀巢庵(54)・戸田寿昌(36)・石黒通玄(34)・大河内構斎(33)・丹波修治(31)・吉田政九郎(30)・中野鍵太郎(26)・千村五郎(25)・田中芳男(21)・高井寿太郎(19)・神田国次(18)・西山春庵(18)・大河内菊三郎(15)。最初の3名以外は、10代～30代の若手だった。

ついで文久2年(1862)3月25日、伊藤圭介の別宅「旭園」で博物会が開かれた。その時の「文久二戌三月本草会目録」(杏雨書屋蔵)には、以下の執事名が記録されている——「浅井儀一郎(正賛)・石黒通玄・大河内構斎・戸田寿昌・松井丹右衛門・吉田政九郎・菊池立伯・横井五郎吉・建部新十郎・平岩弥之七・兼康友悦・森嶋理右衛門」。伊藤圭介は江戸の蕃書調所勤務中だったから名が無いのは当然だが、大河内存真も加わっておらず、嘗百社発足時の世代から若い世代へと移ったことが明らかに見てとれる。

また、資料J・K(次頁)から、文久元年(=万延2年, 1861)と同3年には、あらかじめテーマを決め、月1回のペースで集会が開かれたとわかる。文久元年の会は圭介の旭園で毎月開かれ、『吉川著作集』(18頁)によると、課題の品々を互いに持ち寄って検討したらしい。おそらくは文久3年の会も同じと思われる。この会は若手の始めた新方式であろうか。

しかし、この頃はすでに落ち着かない世の中になっていた。大窪昌章が死去した後に嘗百社を支えていた伊藤圭介は、幕府の命で文久元年(1861)に江戸の蕃書調所勤務となる。同3年春には名古屋へ戻ったが、翌元治元年(1864)には征長総督・尾州侯徳川慶勝に随行して西行するなど、とても嘗百社の面倒をみるどころではなかった。

この頃の資料が乏しいので詳細はわからないが、博物会らしい博物会も文久2年(1862)を最後に、以後は開かれなかったようである。嘗百社は往年の活力を失ったまま維新を迎えた。伊藤圭介も明治3年(1870)には新政府の命で東京に転居し、嘗百社は大黒柱を失った。

結局、嘗百社には激変の時代を乗り切る有力な新指導者も生まれず、明治22年(1889)には交友社(三重県で明治15年に誕生)と合併して嘗百交友社となり、明治35年(1902)頃まではその名で存続して、「嘗百交友社博物会」もほぼ毎年開いていたが、それ以降の消息は明確ではなく、静かに歴史から消え去ったようである[注13]。

[注1] 三村森軒著・小笠原亮編、『朝顔明鑑鈔』、思文閣出版：影印+翻刻

[注2] 三村森軒著、『薬草見分信州木曾山道中記』：翻刻→種田祐司、「薬草見分信州木曾山道

「万延二年旭園本艸会主品」(資料J)：『吉川著作集』(18頁)

万延二年旭園本艸会主品		嘗百社	氏名 [本稿で追加]
正月	金石類・鳥類	活児堂	菊池有英
二月二十五日	梅・山茶花	千艸菴	横井五郎吉
三月	山躑躅・桜	修養堂	伊藤圭介
四月十八日	薔薇・海藻	生濟堂	大河内存真
五月	藻類・穂類	東岡菴	富永武太夫
六月	水虫・繖花	銀杏園	吉田政九郎
七月	虫類・禾本	大班廬 ^{テン}	松井丹右衛門
八月	蓼類・藁品	活児堂	菊池有英
九月	羊齒・菌類	千艸菴	横井五郎吉
十月	稲・苔類	修養堂	伊藤圭介
十一月	介石・魚品	生濟堂	大河内存真
十二月	獸品・実類・砂土	東岡菴	富永武太夫

「文久三癸亥本草会課題」(資料K)：新出資料，筆写

文久三癸亥本草会課題			氏名 [本稿で追加]
正月廿五日	梅・山茶花・禽・獸	千艸菴	横井五郎吉
二月廿五日	柳・桃・桜	禅友居	戸田寿昌
三月十七日	楓・山躑躅	銀杏園	吉田政九郎
四月十八日	海藻・薔薇	翠竹園	建部新十郎
五月十七日	穂類・蝶類	碧海白嶺居	平岩弥之七
六月十七日	繖花・虫類	富春堂	石黒濟庵
七月十七日	羊齒・菜類	濟美館	兼康友悦
八月十七日	蓼・藁品	静観堂	浅井正賛?
九月十七日	菌類・禽・菊	澹雅楼	石井隆庵
十月十七日	楓類・実類・苔類	大班廬 ^{テン}	松井丹右衛門
十一月十七日	五穀・橘	活児堂	菊池有英
十二月十七日	貝・金石・魚	千艸菴	横井五郎吉
		嘗百社	

中記」，名古屋市博物館研究紀要，13巻。

[注3] 表2の人物別文献は以下のとおり：

伊藤圭介→吉川芳秋，「伊藤圭介翁年譜」，『尾張郷土文化医科学史攷拾遺』。

大窪昌章→大窪昌章，『諸国採薬記』，国会図書館（特7-391）／同，『昌章草木集』，国会図書館／磯野直秀，「日本博物学史覚え書」9，『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』，28号。

水谷豊文→吉川芳秋、「尾張本草学の巨擘水谷豊文」末尾の年譜、『尾張郷土文化医科学史攷』（『吉川著作集』343頁の年表もほぼ同内容）／下記注8文献

小栗曾吉→資料F。

松井丹右衛門、丹波修治→『濃州養老山……採薬記』、国会図書館（特7-200）。

[注4] →資料G一注4

[注5] 資料G本文、資料H著者解説を参照。

[注6] 引札などで、開催月日が表3の事例と異なる場合がある。たとえば、「本草会 四月朔於生済堂／三・九月十五日修養堂」とある引札（長谷川資料）は年記が無いが、4月の会は表3のいずれにも該当しない。

[注7] 磯野直秀、日本博物学史覚え書14、『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』、44号。

[注8] 水谷豊文、『[勢志紀] 熊野採薬記』、国会図書館（特7-576）。

[注9] 『江崎悌三著作集』、第1巻、310～314頁、思索社。

[注10] 長谷川 仁、「大窪昌章」、『江戸博物学集成』、平凡社。

[注11] 河村典久、「我が国の印葉図譜について」、『慾齋研究会だより』、59号／「丹波修治と印葉図」、『伊藤圭介日記』V、名古屋市東山植物園。

[注12] 『吉川著作集』、17頁。

[注13] 松島 博、『近世伊勢における本草学者の研究』、講談社：416頁／浅井平一郎、『丹波修治先生伝』、ガリ版刷：河村典久によるワープロ版がある。

第5節 嘗百社とその周辺の人々

嘗百社の名は著名だが、つねに引用される人名は水谷豊文・大河内存真・大窪昌章・伊藤圭介・吉田雀巢庵くらいである。嘗百社の名簿も伝わっていない。そこで、嘗百社の前史時代から幕末まで、関係者と思われる人名を拾いあげてみた。

具体的には、伊藤圭介「沿革」（文献1）、同「尾張嘗百社同遊人名」（文献2）、大河内存真「嘗百社来歴」（文献12）、「本草会課題」（文献14・19）、本草会目録などに、会員・幹事として出る氏名を嘗百社員とみなし、それ以外の人々を含めて、五十音順に収録した（親族は長幼の順）。社員（社友）や、その可能性が高い場合は下線を付した。生没年を欠くのは未詳の場合。【 】内は文献番号で、文献は本節の末尾に一括して示す。

相原駒吉 号／幸水、?～1866【15・20・23】

浅井正翼 名／^{マサシゲ}正翼、通称／董太郎、号／紫山、1797～1860【3・15・25】

浅井正賢 名／^{マサトシ}正賢、字／思文、通称／吉太郎・儀一郎、号／九阜・樺園、堂号／静観堂、1828～83：正翼の長男【3・14・24】

朝寝斎 → 松井丹右衛門

浅野春道 通称／春道、号／鶴巢・栗亭、堂号／思済堂、1769～1840【1・3・17】

浅野文達 【1】

- 浅野昌純 号／翠園【15】
- 石井雄節 慶応2年游心庵物産小会出席【5】
- 石井隆菴 名／絢，字／廷礼，通称／見龍・隆菴，号／澹翁，堂号／澹雅楼，1811～84【3・14】
- 石川八太^{ヤブト} 名／昭徳のち昭嗣，通称／伊織，字／善之丞，号／八太，幼名／八太郎，？～1840【26・27】[注1]
- 石黒濟菴 名／正敏，号／濟菴・富春堂，1787～1836【1・3・12・13】
- 石黒通玄 名／正廉，字／子直，号／通玄・富春堂，1825～？：濟菴の子？【1・2】
- 石黒太郎 慶応2年游心庵物産小会出席【5】
- 銀杏園 → 吉田政九郎
- 一色九郎右衛門 水谷義三郎の実父【5】
- 伊藤圭介 名／清民・舜民，通称／圭介，号／錦窠^{キンカ}・太古山樵，堂号／旭園・十二花楼・修養堂，1803～1901【2・4・13】：家系図→文献4，122頁
- 伊藤圭造 名／圭二，諱／清哲，字／圭造・愚谷，号／桜齋・撫齋，1835～57：圭介長男【1・4】
- 伊藤小春 名／小春：圭介五女，延吉の妻，篤太郎の母【4】
- 伊藤謙 名／謙三郎^{ユズル}・謙：圭介三男，1851～79【4】
- 伊藤恭四郎 名／恭四郎：圭介四男，慶応2年游心庵物産小会出席，1854～1912【5】
- 伊藤延吉^{フキチ} 名／清延，通称／延吉，号／柏園・櫻堂，1842～1909：圭介門人・養子，旧姓／中野【7】：妻は小春，長男は篤太郎
- 伊藤篤太郎 名／篤太郎，号／漆堂，1865～1941：伊藤延吉の長男，圭介の後継者【4】
- 伊藤瑞三 【1・5・12】
- 岩田活洲 号／花木園【1・18・25】：大窪昌章『昌章草木集』に名が多出
- 岩屋平右衛門 【20】：→表2，文政12年項
- 大窪太兵衛 名／光風，通称／多九郎・太兵衛，号／^{ヘイレイアン}藤荔菴，1763～1824：もと山本九十九，大久保多四郎の養子となり，大窪多九郎と改める【4】
- 大窪昌章 名／昌章，通称／舒三郎，号／藤荔菴・蝸牛菴・蝸亭，1802～41：旧姓／志村，太兵衛養子【4・13】
- 大窪安治 名／安治，通称／勘五郎・太兵衛，字／小新吾・小新吾兵衛など，号／藤荔菴，1826～93：大窪昌章の長男【3・16】
- 大河内重昌 名／重昌，通称／存真，号／大川，1736～99：その3代後が次項の存真である
- 大河内存真 名／重敦・重徳，通称／存真，字／子厚，号／還諸子・更生子・東郭・恒菴，八松，堂号／繇條園・生々堂・生濟堂・濟生堂，1796～1883：圭介の実兄，嘗百社の名付け親，「嘗百社交流申入状」の筆者【2・4・13】
- 大河内構齋 名／重熙，字／白皞，号／構齋，生濟堂，1826～？：大河内存真の長男

【2・24】

- 大河内菊三郎 名／重好，1844～？：存真の次男？【2・4】
- 岡林清達 尾張藩御目見医師，1758～1818【1・4・30】
- 岡本万三郎 通称／万三郎，号／古泉齋：大窪昌章『昌章草木集』に名が多出【1・25】
- 小栗曾吉 名／好之，通称／曾吉，号／山楽，1774～1865：尾張の花戸，豊文の採葉によく同行【8】
- 小塩五郎^{オシオ} 名／芳賢，通称／五郎，号／三居巢^{ミイヌ}，1830～94【4・6・10】
- 活児堂 → 菊池有英
- 兼康友悦^{カネヤス} 名／友悦，号／濟美館【5・14・24】
- 神谷三園 名／克禎，通称／喜左衛門，字／伯劣，号／三園，1788～1871【4】
- 観象堂 → 吉雄常三
- 神田国次 名／朗，字／子潤，号／栗谷，1841～？【2】
- 神波挺庵^{カンナミ} 名／愨，号／挺庵：雀巢庵門人，1830～94：神波全庵と同人か【9】
- 菊池有英 名／有英，通称／立伯，号／活児堂，1838～1901【1・5・27】
- 亀望亭 → 松井丹右衛門
- 玉華園 → 戸田寿平
- 玉芝園 → 白木屋翠嶽
- 芹園^{キン} → 戸田寿昌
- 鉤致堂 → 水谷豊文・水谷義三郎【16】
- 小塩五郎 → オシオ
- 三居巢 → 小塩五郎：小塩は「オシオ」，三居巢は「ミイヌ」と読む
- 山楽 → 小栗曾吉
- 思濟堂 → 浅野春道
- 柴田洞元^{マサフミ} 名／正簡，字／子廉，号／西坡・溶々齋・松坡，1767～1845【1・17】
- 雀巢庵 → 吉田平九郎
- 修養堂 → 伊藤圭介
- 笑鼠 → 水谷助六（三代）
- 白木屋翠嶽 号／玉芝園【1・25】
- 翠竹園・酔竹園 → 建部新十郎
- 鈴木容庵 慶応2年游心庵物産小会出席：尾張藩医鈴木常明の養子【3・5】
- 静観堂 → 浅井正贇：静観堂は医学館と改称するまで浅井家代々の堂号だった。
- 生濟堂 → 大河内存真，大河内構齋
- 濟美館 → 兼康友悦
- 清風園 → 丹波修治^{ニッ}
- 千々園 → 吉田政九郎
- 千艸菴 → 横井五郎吉

- 千村五郎 → チムラ
- 禪友居 → 戸田^{トダ}寿昌
- 曾吉 → 小栗曾吉
- 大班^{テン}麿 → 松井丹右衛門
- 高井寿太郎 名／智，字／好士，号／椿堂・春亭，1840～？：美濃太田人【2】
- 建部新十郎 号／醉竹園・翠竹園【5・14・15・24】
- 田中芳男 名／章・芳男，俗称／芳介，字／士成，号／東陽，1838～1916【2】
- 澹雅楼 → 石井隆菴
- 丹波修治 → ニワ
- 千艸菴 → 横井五郎吉
- 千村^{チムラ}五郎 名／仲精，字／百鍊，号／健堂・小木曾山人，1834～？【2】
- 東岡菴 → 富永武太夫
- 戸田^{トダ}寿昌^{トダ} 名／寿昌，通称／五郎兵衛，字／孟諤，号／芹園^{キン}・禪友居，1823～87【1・2・14・15・26】
- 戸田^{トダ}寿平^{トダ} 通称／寿平・寿太郎，号／玉華園：戸田寿昌の長男【1・25】
- 舍人^{トネ}重臣^{シゲツカ} 本姓／清原，名／重臣，字／君規，通称／武兵衛，号／一徳，1779～1847【3】
- 富永武太夫 名／兼章，通称／武太夫，号／東岡菴，1795～？【2】
- 中島周賢 慶応2年游心庵物産小会出席【5】
- 中野鍵太郎 名／延年，字／旭亭，号／月嶠，1833～？：画家【2】
- 西山玄道 名／清貞，通称／玄道，号松隱，1752～1843：旧姓／伊藤：大河内存真・伊藤圭介の実父【1・4・9】
- 西山春庵 名／尚孝・文雄，字／子孔，号／清陰・春庵，1843～？：玄道の孫【2・4】
- 丹羽^{ニワ}松齋 通称／周助，号／松齋：丹波修治の伯父【21】
- 丹波^{ニワ}修治 名／公憲，通称／修治，字／之翰，号／退翁・菅屋・清風・拙義園・群芳園・修齊堂，1828～1908：修治の代に丹羽を「丹波」に改めた【2・22】
- 丹波周伯 通称／周伯，字／之裕【22】〔注2〕
- 野村立栄 名／元幸・劉瑛，通称／舍三郎^{リュウエイ}・立栄（初代），字／子玉・伯正，号／三扇堂・三学堂・健翁，1751～1828：蘭医，水谷豊文はその門下【4・9】
- 平岩弥之七 通称／弥之七，号／碧海白嶺居【1・5・14・24】
- 富春堂 → 石黒濟菴・石黒通玄
- 藤^{ヘイレイアン}荔菴 → 大窪太兵衛・大窪昌章・大窪安治【16】
- 碧海白嶺居 → 平岩弥之七
- 松井丹右衛門 名／鶴羨，通称／丹右衛門・白翁，号／雨白・含嘲・朝寝齋，堂号／大班^{テン}麿・龜望亭，1814～84【3・4・5・24】

<u>松井信一郎</u>	名／吉享【1・5】
<u>水谷覚夢</u>	名／光和・元久，通称／友之右衛門，号／覚夢・玉泉，1747～1830：水谷豊文の父【1・3・4・11】
<u>水谷豊文</u>	通称／助六（初代），名／豊文，字／伯猷，号／有斐軒，鉤致堂，1779～1833【4・13】
<u>水谷義三郎</u>	通称／助六（二代），名／光之・豊光，通称／義三郎，字／章圃，号／鉤致堂，1806～46：水谷豊文の養子【4・16】
<u>水谷助六</u>	通称／助六（三代），名／惇章，号／笑鼠，1840～1917：義三郎養子【4・11】
三園	→ 神谷三園
<u>森嶋理右衛門</u>	通称／理右衛門【24】
<u>柳田政矩</u>	名／政矩，通称／良平，字／鵬巢，号／凌雲，1797～1859【8・9】
<u>山口喜兵衛</u>	名古屋の葉舗【1】
<u>山中八十郎</u>	名／寛紀，通称／八十郎・九十郎，1778～1840【1・3・4・15・23】
<u>溶々齋</u>	→ 柴田洞元
<u>横井五郎吉</u>	通称／五郎吉，号／千艸菴【5・14・24】
<u>吉雄常三</u>	名／尚貞，通称／俊藏・常庵・常三，字／伯元，号／南阜・觀象堂，別名／羽栗洋齋，1787～1843：蘭医，伊藤圭介の師【4・9】
<u>吉田政九郎</u>	名／有政，通称／平太左衛門・甚兵衛，号／千々園・銀杏園，1829～？【2・5・14・24】
<u>吉田平九郎</u>	名／高憲，幼名／世良太郎，通称／平九郎，字／地岳，号／雀巢庵・藪月など，1805～59【1・2・11】
<u>渡辺又日菴</u>	名／規綱 ^{ノリツナ} ，通称／半藏・兵庫入道，号／又日菴 ^{ユウジツアン} ・楽々軒，1792～1871【3・9・16】

[文献]：順不同，『吉川著作集』＝文献4の略称

- 1 伊藤圭介，「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雜記」，『錦窠翁九十賀寿博物会誌』：『吉川著作集』30～33頁に採録：文献12を土台にしている
- 2 伊藤圭介，「尾張嘗百社同游人名」，『吉川著作集』，17頁
- 3 『名古屋市史・人物編』，国書刊行会
- 4 吉川芳秋，『吉川芳秋著作集：医学・洋学・本草学者の研究』，八坂書房
- 5 『尾張医家本草関係者名簿』（長谷川資料）
- 6 土井久作，「採集家小塩五郎翁のこと」，『採集と飼育』，9巻11号
- 7 「伊藤延吉」，国立国会図書館編，『人と蔵書と蔵書印』，雄松堂出版
- 8 長谷川資料「小栗曾吉資料」→資料A～資料F
- 9 『国書人名辞典』，岩波書店

- 10 吉川芳秋, 『紙魚のむかし語り』, 私家版
- 11 吉川芳秋, 『尾張郷土文化医科学史攷』, 尾張郷土文化医科学史攷出版会
- 12 大河内存真 「嘗百社来歴」 →資料G
- 13 「嘗百社交流申入状」 →資料H
- 14 「文久三癸亥本草会課題」 →資料K
- 15 嘗百社編, 『乙未本草会物品目録』, 江戸科学古典叢書45, 恒和出版
- 16 吉田雀巢庵編, 『尾張名古屋博物館目録』: 「鉤致堂」の号が水谷豊文の没後, 「薜荔菴」の号が大窪昌章の没後にも使われており, それぞれ後継者が号を受け継いだとわかる
- 17 「文政十年修養堂本草会」, 『本草会目録』(国会図書館・W391-3)に所収
- 18 「文政十年生済堂本草会」, 『本草会目録』(国会図書館・W391-3)に所収
- 19 「万延二年旭園本艸会主品」, 『吉川著作集』, 18～19頁 →資料J
- 20 大窪昌章編 『諸国採薬記』, 国会図書館蔵自筆本(特7-391)
- 21 丹羽松齋, 『城和撰諸州採薬記』, 国会図書館蔵自筆本
- 22 松島 博, 『近世伊勢における本草学者の研究』, 講談社
- 23 吉川芳秋, 尾張本草学と飯沼慾齋, 『飯沼慾齋』, 飯沼慾齋生誕二百年記念事業会
- 24 『文久二戌三月本草会目録』, 杏雨書屋蔵
- 25 『薬品会目録』, 大東急記念文庫蔵(54-16-2917)
- 26 長谷川 仁, 「大窪昌章」, 『江戸博物学集成』, 平凡社
- 27 島関 真, 「虫譜を中心に見た尾張本草学」, 『伊藤圭介日記』, 第13集, 名古屋市東山植物園
- 28 小西正泰, 『虫と本と人と』創森社: 428頁
- 29 浅井平一郎, 『丹波修治先生伝』, 私家版: 河村典久翻刻のワープロ版による
- 30 野村立栄, 『三扇堂鬼簿』, 国会図書館蔵自筆本

[注1] 石川八太^{ヤフト}はこれまで謎の人物だったが, 最近島岡【27】によって詳細が判明した。それによれば, 八太は石川昭臣(伊織, 尾張藩御書院番頭, 1000石)の嫡男で, 幼名は八太郎, 名は昭徳のち昭嗣, 通称は伊織, 字は善之丞。「八太」はおそらく幼名に由来し, 通称か号であろう。生年は未詳だが, 没したのは天保11年(1840)11月。嫡男の昭英(十太郎^{クラノジヨウ}・内蔵允)が跡を嗣いだ。

八太には以下の博物関係資料が知られている。

- ① 八太筆『駱駝写真図』が国会図書館に所蔵されている。2頭のヒトコブラクダを描くが, 文政9年(1826)に名古屋で見世物になった雌雄と思われる。
- ② 大東急記念文庫に, 大窪昌章が文政10年(1827)5月に転写した『石川八太昭徳筆記』甲乙2巻が残る(同文庫目録の「文化10年」は誤り)。これは『石川虫譜』としても知られる資料で, 墨絵だが要領を得た図が計1000点も描かれている【26】。『八太翁虫品』(内閣文庫), 長谷川旧蔵書の『虫譜』(甲巻のみ)も同本である。

- ③ 文政10年(1827)9月に尾張名古屋で開かれた生済堂本草会【18】に、八太はカブトガニと含水水精(水晶)の2品を出品している。
- ④ 文政10年12月刊の舎人重臣編『有毒草木図説』に2品の図を描く。舎人は尾張藩士。
- ⑤ 八太筆と伝える『石川八太魚獸写生図』が国会図書館にある。魚類7品、獸5品、空想上の動物7品、他6品、計25品を無彩で描くが、作成年は不明。

以上のうち②～④の資料から、尾張の博物家たちと交流があったことが確かだが、水谷豊文の3回忌追善本草会の記録『乙未本草会目録』【15】には名が見えないから、嘗百社のメンバーではなかったのではないか。

さて、今回我々が調べた長谷川資料中に「諸家ノ略伝」(丹波修治?)というメモがある。それに「石川八太ナル人ハ未詳、或ハ内蔵允ノ先代トモ申シ候。此ノ内蔵允ハ明治ノ初年、朝命ニ依リテ死ヲ賜ヒタル尾藩十三人[ママ]ノ一人ニテ、慷慨家ナリシト云フ。而シテ博物ノ学ヲ好ミ、屢々伊藤圭介翁モ出入セラレタリ。八太翁ハ水谷豊文時代ニテ、同臭ノ一人ナリシナラン。虫譜ノ外、別ニ著書アルコトヲ聞カズ」(全文)と記されている。『幕末維新全殉難者名鑑-4』(新人物往来社)には、内蔵允は尾張藩佐幕派の幹部の一人で、「石川内蔵允、昭英、千石、大番頭格：明治元年一月二十日、名古屋域内で斬、四十二歳、大光院に墓」とある。

これは「青松葉事件」といわれる尊王派による公武合体派弾圧で、14名が処刑されて尾張藩に大きな傷跡を残し、同地では以後この事件に触れるのはタブーとなった。それ故、圭介をはじめ、博物家たちも口を閉ざし、回顧談でも石川父子(昭徳と昭英)について語るのを避けたのだらうと、島岡【27】は推測している。

[注2] 丹波周伯の名は、『本草真影』巻11(安政5年：国会図書館、別13-38、特1-3312)と『濃州養老山／尾州水野・二ノ宮・本宮・内津・入鹿／勢州福尾山採葉記』(国会図書館)中の勢州採葉記(文久3年)に出る。丹波修治の孫に周伯がいる【29】が、明治28年生で年代が合わない。

第6節 おわりに

冒頭にも記したように、本稿は、故長谷川 仁 先生の蔵書を御遺族が国立国会図書館に寄贈するに先立って、2009年夏に資料整理の目的で作成した。ここで紹介した資料は、「伊藤篤太郎→矢野宗幹→長谷川 仁」と伝わったらしいものが多い[注1]。なかには、篤太郎が祖父の伊藤圭介から受け継いだものや、圭介からの聞き書きも含まれる。

伊藤家資料に尾張関係のものが多いのは当然だが、長い年月が経ち、何人もの手を経ているので、膨大な資料が方々に分散して収納されており、一通り整理して内容を把握するには半年を要した。

しかも、ここに紹介した尾張関係資料は、長谷川旧蔵書のほんの一端にすぎない。

長谷川先生は昆虫が御専門だったから、『薜荔菴虫譜』『群蝶譜』をはじめとする江戸時代虫

類図譜が旧蔵書に多いのは当然だが、昆虫以外の動物に関するものも、植物方面の資料も数多く存在している。たとえば、『野鷲ノ説』『鳥之種類』『伊藤篤太郎禽譜稿』などの禽書、『唐船持渡草木写生図』『難波新花』『東京三田育種場植物図解』（本号の別報文参照）などの植物資料、服部雪斎の自筆画スケッチ（カンムリツクシガモほか）、日本博物学会の手書き機関誌『博物之友』1～5号の抜書き等々。そのなかには、新出資料が少なくない。

未整理の長谷川旧蔵書もまだ残っている。これからも尾張関係の新出資料が現われる可能性は少なくないが、ひとまず区切りをつけて報告しておく（2009年9月22日記）。

[注1] 長谷川先生の師だった矢野先生は白井光太郎や伊藤篤太郎と親しく、国会図書館の白井文庫・伊藤文庫が同氏の仲介によって帝国図書館（国会図書館の前身）に入ったことは、よく知られている。

謝辞

長谷川 仁先生旧蔵書の調査を公表するに当たっては、先生の御長男幹氏に御諒承いただき、また国立国会図書館の大沼宜規氏から難読個所について、同じく膝館寿巳恵氏から伊藤延吉について御教示を受けました。この場を借りて、皆様に御礼を申し上げます。